

平成 28 年度 教養講座「協働研修会」 概要

○日 時：平成 29 年 3 月 21 日（火） 13 時 30 分～15 時 30 分

○場 所：市役所 5 階 大会議室

○参加者：36 名

○テーマ：「職員の経験談から学ぶこれからの市民協働」

○パネリスト：

- ・ 政策秘書室 川原綾乃副主幹（市制施行 50 周年記念事業実行委員会）
- ・ 経営企画課 金澤 哲 副主幹（第 4 次総合振興計画後期基本計画協働会議）
- ・ 資産管理課 今泉良太副主幹（公共施設等総合管理計画策定に係るまちのデザイン会）

1 職員協働ハンドブック「協働羅針盤」の説明

職員が協働を実践的に進めるためのハンドブックとして作成した「協働羅針盤」の内容について解説しました。

2 パネルディスカッション

パネリストが事務局として関わった事業（会議）での市民委員との関わり方などについて、実体験を交えてお話いただきました。



（1）事業内容について教えてください。

川原：市制施行 50 周年記念事業実行委員会の下部組織・実働部隊として、平成 27 年度から記念イベントの開催を主目的として「祭部会」を設置しました。（他に式典部会、広報・PR 部会あり）市民部会員・職員部会員で一から内容について検討していきました。

部会では、お祭りの合い言葉に『市民がキャスト』を掲げ、市民がゲストではなく、祭りの一員となるようなイベントとしました。決まりきったお祭り

ではなく、プロを入れずに、あくまでも「市民の手でつくる」ことを大切に
したため、約1年半の間に42回もの会議が開かれることとなりました。その
結果、10月1日の当日には約32,000人もの集客につながりました。

金澤：第4次総合振興計画後期基本計画の策定については、「計画の策
定段階から協働を実践していく」をコンセプトとして、平成2
6年8月から翌年2月まで計9回の会議を開催しました。
コンサルタント業者を入れず委員とともに作り上げたこともあり、委員と事務局間の連帯感はとても濃いものでした。



一般的に計画づくりの市民会議というと、現状や課題を把握し、今後どうし
ていくべきか提言してもらうまでで終了ですが、当会議は、「協働の実践」と
いうことで、提言された取組を三者（市民、議会、行政）がそれぞれどのよ
うな役割を担っていくかまで話し合い、提言書にまとめました。

今泉：公共施設等総合管理計画を策定するための市民会議（まちのデザイン会）は、
市民委員と職員委員でワークショップ形式で5回開催しました。
公共施設の利用者だけでなく幅広い意見を聞くために、事前に実施したアン
ケート調査（無作為抽出2,000人）の中で委員を公募しました（9人）。また、
公共施設をあまり利用していない中立的な立場の市民としての意見を求めて
高校生、大学生も委員に入れました。

（2）公募市民はどう選考しましたか。

川原：応募してきた市民は全て受け入れるつもりでした。公募市民の
1人が他の方に声掛けをして、多くの市民を誘ってくれました。
（祭部会は6名）



金澤：あらゆる分野における計画であることから、市民として各種団
体からの出席をお願いしたこともあり、3名程度の募集をした
ところ、2名の応募がありました。応募多数の場合の対策については、特段、
行ってはいみせんでしたが、申込書に応募動機を記入することとしていたの
で、応募多数の場合の選考の資料としては担保していました。

今泉：31人の市民委員の枠（職員委員は19名）を取っておき、事前アンケート調
査（2,000人）から応募してきた市民（9人）を先に内定し、残りの枠を各種
団体から選出しました。公募市民については、事前にその人柄などを把握す

るために申込書に「会議でどんなことを話し合いたいのか」の記載欄（任意）を設けました。

（３）市民委員を入れて良かった点、苦労した点を１つずつ教えてください。

	良かった点	苦労した点
川原	アイデアが斬新で、行政だけだと既存イベントに頼り、保守的なものになってしまうところを、面白い（良い）ものになろうと様々なアイデアが出た。口コミにより、多くの人を巻き込むことができた。	市民委員は皆、想いは強いが、考え方が様々で、会議の中でまとめることに苦労した。 対策としてアイデアに点数を付けて決めていくようにした。一部の勢いのある人の意見だけを採用するのではなく、その場で発言できない人の意見を吸い上げることも大切。
金澤	コンサルタント業者を入れなかったこともあり、会議運営について会長・副会長（市民）を始めとした各委員が親身になって協力してくれた（市民、議会、行政の三者が一体となった会議となった。）。	委員の意見が大局に立ったものでなく、各々がその時に置かれている状況を基にした意見が出されるため、論点がずれることもあり、まとめることに苦労した。また、説明内容をかみ砕き、できるだけわかりやすいよう努めたが、理解いただくのは困難であった。 →市民委員に細かいことを求めず、自由に発言していただく中でおよそのニーズをつかむことでよしとする構えが必要だったと感じた。
今泉	公共施設再編の反対意見が多く出るのではないかと警戒し、施設利用者だけに偏らないように委員を集めたが、事前に会議の目的を説明しておいたため、施設利用者からも自己利益のみに偏らない積極的な意見が出された。	市民会議は時間がかかる。市の現状から把握してもらうために丁寧な説明が必要になる。どういう点を市民から聞きたいのか、ポイントを絞って聞くことが大切。

（４）事業を進める中での市民委員と職員委員に求めた役割は？

会議の場以外でどんなことをしたのか？

川原：市民委員・職員委員混合でチームを組んで行いました。市民はアイデア出しや口コミでの人集め、職員は事務作業の裏方的役割、と会議を重ねる中で自然とそれぞれの強みに役割が分かれてきましたね。

当初、職員委員は遠慮してなかなか発言できず、市民からもそれについてご意見いただくこともあったのですが、最終的には活発に意見を交換するようになり、引っ張ってくれました。イベント開催後には、職員部会員の事務能力、市

民のアイデアを形にする力を高く評価していました。事前調整は、部会長（市民）と副部会長（職員）でざっくりばらんに打ち合わせをしました。双方の考え方や譲れない部分など、率直な意見を聞く機会となったため、お互いの立場を尊重しながら祭りの成功のために進めることができました。

金澤：会長、副会長の選出は互選でしたが、その際、事務局の考えを求められたので、会長、副会長は、市民であること、そして、中でも若い年齢の方に出番を作りたい旨を示しました。検討に当たっては、四つのグループに分けて検討を行い、職員委員は、グループの調整役をお願いしました。事前打合せに時間を割き、事務局の考える方向に検討が進むようフォローしていただきました。中々、思うように話し合いが進まないことが多く、一番苦勞されたのは職員委員だったと思います。

今泉：うちの会議では、事前調整はしていませんでした。まっさらな状態で会議に



臨んでいただき、率直な意見をいただいていた。まちのデザイン会には、本計画の別の検討組織である施設担当職員ワーキング会議に参加している市職員にもファシリテータ役として参加していただきました。

デザイン会のグループワークでは、自分の意見が言えないことや、市民委員から事務局に直接言えない不満や疑問を聞かされていたので心理的な負担もあったと思います。しかし、市民と事務局の橋渡し役を担っていただいていたので、会議を円滑に進行できた大きなポイントだったと感じています。

（５）これから協働の事業を進めていこうとする職員に対して一言。

川原：市民は使命感を持って会議に参加しています。意見がまとまらないことを面倒くさがらずに、とことん付き合っていくことが重要ですね。『市民は自分の時間を割いてボランティアで市に協力してくれている』ことを忘れないでください。また、市民委員のスキルを活用することも有効ですが、通常は対価が発生するものを厚意でやっていただいているので、あまり甘えすぎないように注意が必要です。負担が大きくならないように業者などに発注したり、正当な対価を支払うなどの対応が必要になると思います。

市民が残した実績を顕すなど、努力に対してかたちに表すようにすればよか

った点も悔やまれます。また、楽をしようとする姿勢は、市民は敏感なので、すぐに見抜かれてしまいますので、気を付けてください。

協働は、大変ですが一生懸命やった分だけ充実感や信頼関係も生まれますし、120%の成果を出せるものだと思います。

金澤：「協働羅針盤」に書かれていることは、振り返ってみるとどれも重要なポイントです。そして、協働を進める上で最も重要なのは、市民との信頼関係を構築することです。市民との信頼関係を構築するための重要なポイントは、特に、以下のことであると考えます。

●情報不足の解消、情報共有の場の設置

会議では、お互いの情報不足が市民・職員の双方から聞こえてきました。このことから、事務局、職員委員は、相当の準備をして臨む必要があると感じました。また、情報共有の場を多く設ける必要があると感じました。

●“キーマン”を発掘し、育成すること

自治基本条例制定に向けた検討においてアドバイザーを務めていただいた相模女子大学の松下教授は、「市民の出番を多く作れ」と良く話していました。これは「これまで参加したことのない市民の出番を作ることや大勢の人の出番を作る」だけでなくこれまで様々な機会に何度も参加してきた人も含め、その中から、市民のリーダーとして他の市民を引っ張っていくことができる「“キーマン”を発掘し、育成すること」が重要であると理解しています。キーマンが委員となることで会議も円滑に進むと思います。

今泉：市民との協働は、大変なことや不安なことも多いが避けられないものになっています。協働によって、市民との信頼関係を作っていくことが本当に大切だと感じました。